

「殿。大膳亮にござります」

正木通綱の声が響いた。

「はいれ」

義豊は低く、応えた。

「大膳亮に、どうしても問いたかったことがあつてのう」

義豊はまばたきもせずに通綱をみた。いつになく落ち着き払ったその態度に、通綱は殺意にも似た気配を、直感的に悟った。

「いかがした。もつと近う」

「いえ。これにてお答え申し上げます」

通綱は襖に近いところに膝をついた。

「正木の者たちは、在地豪族として領民を潤している。さればこそ、二統のためには、在地豪族の理解が欲しいのだ」

「そのこと、先代からも承っております。殿の夢は、現実には遠いものなり」

「二統のため、所領を里見家に差し出すがよい。さすれば、そつくり里見家から恩賞としてそれを与えることを約束する」

「……なにを？」

義豊の申し様は一方的だ。

所領を与えるから年貢をそつくり納めよ。されば六割を俸禄として与えるという。

これは、在地豪族の尊厳を奪うものだった。そもそも在地豪族の所領は、里見家から与えられたものではない。正木だけの問題ではなかった。この理屈は、どうあつても受け容れる訳にはいかない。

「どうしてもか？」

「……」

「そうか」

途端、襖が倒れ込んだ。

突然の出来事に、あつと見上げた正木通綱は、倒れてきた襖に押し潰された。そのうえから、無数の鎧が突き立てられた。

あつという間の出来事である。

「大膳さま！」

供していた上野筑後守は悲鳴に近い声を挙げたが、その首も、瞬時に飛んでいった。

義豊は顔色ひとつ変えることなく、じつと眺めながら

「こんなものか」

やはり、ぼつりと呟いた。

宮本城から里見実堯が駆けつけたのは、半刻も経たぬ頃であった。

正木通綱の骸を前に

「これは何事？」

と、実堯は詰め寄った。

「謀叛にござる」

「謀叛だと？」

義豊は顔色を変えることなく、淡々と言葉が続けた。

「大膳亮は水軍を我が物とし、稲村を攻めようとしていたのです」

「馬鹿なことを申されるな」

「叔父上も一味ではござらぬか？」

「殿？」

じつと、実堯は義豊をみた。

成る程、ここへ呼んだのは、畏ということか。

義豊もいつになく落ち着き払っている。腹を括った者は、躊躇いがないのだろう。

「海賊衆を手懐けて、よもや儂を攻め殺そうと考えたのではございせんか？」

「お前、阿呆か！」

呆れたように、実堯は吐き捨てた。

「よろしいか？里見が生き残るためには、二統などという夢を語ることなく、安房のすべてが結束しなければならぬ。内憂外患を退けてはじめて、殿の望む二統の道が開けるのじや」

わかるかと、実堯は詰った。

「大膳は里見に尽くしてきた。それを、殿こそ私利私欲で殺したのですぞ！」

実堯は激しく吼えた。

このように激昂する実堯は、初めてではあるまいか。しかし義豊とて、もはや後には引けない。その理と相容れぬ己の我を貫くまでだ。

実堯の激昂を跳ね返すように

「だまれ」

強い口調で叫んだ。

「いまの儂は、そなたら奉行衆の傀儡ぞ！」

何を云いだすのかと、実堯は目を丸くした。

「もう、傀儡は御免だ」

「情けないことを申される」

「傀儡にされるのは、真つ平だ」

餓鬼の駄々に等しい。

「傀儡なんぞ、もはや我慢ならず。覚えたか叔父上！やがては権七郎もそちらへ送つてやるほどに、安心して成仏せい」

「なに？」

「なに？」

「さらば、叔父上！」

義豊の指図に、御傍衆は一斉に刃を突き立てた。

彼らは純粹に実堯を憎んでいた。

躊躇いもなく、その白刃は実堯の身を激しく

切り刻んでいった。

何の感情もなかった。

ただ目の前には、あれほど目障りと思っていた叔父の骸が、何も語ることなく伏していた。

「あとは、長狭と久留里の吉報を待つだけにござります」

本間八右衛門の言葉に、義豊は何度も頷いた。
やがて

「片付けておくように」

そう言い残して、座を立ち上がった。

稲村城から滝田城へは、安房府中を経由して

平久里川を上った先になる。城主・一色九郎と

は、美の婚礼以来会っていない。

義豊が単身、ふらりと滝田城へ現れたのは、

実堯を殺害した直後のことである。

「殿、これはなんとしたこと」

突然の来訪に、一色九郎は慌てて出迎えた。

「九郎殿は里見の大切な婿である。これからのことを話し合いたい」

「これは是非もなし」

「宮本へ留め置き、常より監視を頼んでいた叔父の処遇だが」

「はい」

「先ほど、始末した」

「は？」

「もはや、里見の統率者は儂のみである。ゆえに義弟として、九郎殿を信の置ける無二の者として頼むものである」

一色九郎は困惑した。

聡明な彼には、実堯の存在が里見にとってどんなに重いか、よく理解できていた。

里見家の大黒柱を殺害したら、果たしてどうなることか。その答えがすぐには浮かばなかった。

十十十

犬掛へ(2)

夢酔 藤山